

お涅槃（ねはん）

お釈迦さまのお涅槃

枕団子 涅槃団子

衰弱がひどくなられたお釈迦さまは、食事をおとりになりません。弟子のひとりが、喉の通りをよくするために、ご飯をすりつぶし、団子に差し上げました。けれど、お釈迦さまは「私はチュナンダの食事をもって最後としたのだから」と、ついに召し上がることなく、枕元に残されました。

遺言

真夜中。お釈迦さまは、悲しんでいる弟子や多くの人々に最後の教えを説かれました。「いたずらに悲しんではならない。世は無常である。生あるものは必ず滅する。私の肉体が滅びても、説いてきた教えは残る。これから頼るべきものは、よく調べられて自分自身であり、私が説いた教えである。怠らず励むがよい。「自灯明」自らを灯明とし、よりどころとする。「法灯明」お釈迦さまの教え（法）を灯明とし、よりどころとする。このようにお釈迦さまは言い遺されました。そして無常なる命であることを、身をもって示されました。

紙華 四華

時に旧暦二月十五日、満月の煌々と輝く中、お釈迦さまは八十歳のご生涯を終えられました。そのとき、四方の「沙羅双樹」は悲しみのあまり、真っ白に変じて立ち枯れたといいます。その様は白鶴の羽を広げた姿に似たところから「鶴林」とも呼ばれています。やがて沙羅双樹は無常を喩える樹として知られるようになりました。

通夜

長老アヌルッダは、比丘や信者が憂い悲しみ、頭髪を乱して泣き、打ち悶えて嘆いているのを見て、「止めよ、止めよ、悲しむことなかれ」とさとし、さらに法（み仏の教え）を説き、アーナンダたちと共に夜を徹して、お釈迦さまを偲べられました。

納棺

お釈迦さまのご遺体は浄香湯で沐浴（湯灌）され、布と真綿につつまれ、棺に納められました。まわりは花で飾られ、祭壇にはよい香りのお香が焚かれ、一人ひとりご遺体に礼拝し供養が続けられました。

葬列

お釈迦さまのご遺体を安置すること七日間。人々は香、花、音楽を奏じて供養を続けました。時に日暮れとなり、いよいよ茶毘場（火葬場）へと葬列は向かいます。クチラ城の四つの門を出入りし城内外の人々に供養を受けながら、天蓋の傘をさし、人々が無情を悟るよう、「無常③」の幡を掲げ進んでいきました。

散華

このとき、不思議なことに空中より種々の花が、お釈迦さまの棺と葬列の人々の上に舞い降りてきた

のです。

一本花

教団最長老のマハーカッサパは、ほかの弟子たちに五百人と共に遠くで伝道の旅をしているときに、お釈迦さまの危篤を聞き、クシナーラに急いでいました。近くで、異教の修行者がマンダーラという花を一本、手にしているのを見て声をかけます。マハーカッサパはその修行者に「お釈迦さまは七日前にこの世を去られました。それ故に私はこのマンダーラの花をその場からいただいて来たところです」と聞き茶毘場へ急ぎます。

法炬 松明

茶毘場に移されたお釈迦さまのご遺体に、マツラ部族の長が火をつけようと何度か試みましたが、どうしても火が付きませんでした。そこにマハーカッサパが到着し、最高の敬意を表するために、お釈迦さまの棺の前に近づき、三度の礼拝したのち、棺の周りを右回りに三度廻ってから香木の薪に点火すると、不思議なことに燃え出しました。

引導

お釈迦さまは生前、父スッドーダナと養母マハーパジャパティの葬儀に関っておられます。父の棺を兄弟、いとこと共に茶毘場に運ばれ、香を焚いて自ら引導されたと言います。お釈迦さまは、葬儀に臨んで「一切の行は無常なり。生ずる者は必ず尽くところ有り。不生即ち不死、この滅を最樂とする」（無常偈）と唱え、引導を渡されました。なお、養母はお釈迦さまの女性の第一の弟子となり、悟って、教団の母として尊崇されました。

卒塔婆 塔婆 石塔

ご遺骨は、人々の切なる願いによって八カ国に分骨されました。のちのち、ご遺骨は各国に伝えられ、「仏舎利塔」が各地に建立されていきました。

亡き人を送る

【末期の水】

最も近い近親者から順に、ガーゼや脱脂綿などで故人の口に水を含ませます。

【湯灌】

沐浴と剃髪（現在では髪を整える）及び爪を切ることは、経典や祖録にも記されており、清浄を保つために大切なこととされている。

【入棺・納棺】

お釈迦さまは、沐浴して新しい布で包まれた上に真綿の布で覆われ、さらに布で包まれ白檀の香と香油を満たした棺に納められたと伝えられます。ご遺体は、棺の底に白の薄い布団、または白い布を敷き、遺族が静かに納めます。

【通夜】

お葬式の前夜、親戚や知人が最後の夜を共に過ごします。お釈迦さまがお亡くなりになった夜、多くの弟子たちが集まり、夜を徹して生前を偲びました。

【焼香】

お堂を建てた仏弟子が、早くお釈迦さまを迎えようと香えんを焚いたところ、香えんが遠く離れたお釈迦さまの頭上を覆い、その願いが届いたと言われています。香は仏さまをお迎えする作法であり、また香④の儂さから無常の象徴でもあります。お焼香は基本的に、抹香は一回、線香は一本を額の念じておあげし、手を合わせます。

【葬儀と授戒】

葬儀は単にお別れの式というだけではありません。授戒の式が大切です。授戒は本来、生前に戒法を受けて仏弟子となる儀式ですが、葬儀の場において亡き人に対しても、菩提寺の住職が導師となり戒法を授け、生前と同じように行われます。

【戒法】

戒法は迷いのない安らかな心で生きる指針とも言えるものです。授戒では、その戒法を十六の方面から説く「十六条戒」が授与されます。

【葬儀式】

剃髪 最初に仏弟子となるために髪を剃る儀式を行います。

懺悔 今まで知らずに犯してきた罪業を悔い改め、身を正し、心身共に浄らかになることです。

洒水 み仏の智慧をいただくために、代々の仏さまが受け継いできた浄らかなお水を頂戴します。

十六条戒授与

次の十六条があります。

三帰依文

仏・法・僧の三宝を信じ自己の命をありのままいただくことです。

三聚浄戒

わるいことをいたしません、善いことをいたします。進んで人々のために尽くします。

十重禁戒

仏弟子としての生き方を十に分けて説いています。

戒名

戒法を授けていただき、仏弟子となった証明のお名前です。

血脈

お釈迦さまの教えを受け継いだ祖師方の名前が系図のように記されたもの。導師にまで至り、最後に

個人の戒名が記されます。これを授かり仏の位につきます。

法炬

松明のことです。お釈迦さまを荼毘（火葬）に付するとき三度礼拝し最高の敬意を表し、最高の敬意を表し右・左に円相ののち、薪に天下したものです。

引導法語

「引導香語」ともいいます。故人生前の徳を讃えて、み仏の世界に安住するようにとの願いを込めて述べます。

【中陰 四十九日】

中陰は、いのちのあるものが生死に流転するすがたを表した「四有」という考え方から生まれました。四有とは「生有・本有・死有・中有」のことです。生有は生まれる瞬間、死有はいのちを終える瞬間。本有は生きている間、中有は死有と次の生に至る間のことです。この中有を一般に「中陰」と呼び、七日ごとにお参りをし、四十九日（満中陰）が最後となります。

【位牌】

白木の位牌は四十九日までのものです。以後は新しい位牌をととのえ、菩提寺の住職に「開眼」のおつとめをしてもらいます。

【百ヶ日】

百ヶ日目を「卒哭忌」と言います。卒哭とは、悲しみの心をおさめることです。

【塔婆】

お釈迦さまの舍利（遺骨）を納めた証として建てられ、故人の供養のために中陰塔婆、百ヶ日塔婆などとして建立されるようになりました。